

2017年1月19日

株式会社 第一生命経済研究所

晩産カップルの人生設計への意識

～ 出産時に「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識した人は半数以下 ～
妻が35歳以上で出産した40～59歳既婚男女へのアンケート調査より

第一生命ホールディングス株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 矢島 良司）では、妻が35歳以上で出産した40～59歳の既婚男女1,087人に対して「子育てと人生設計に関するアンケート調査」を実施しました。このほどその調査結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

本リリースでは、当研究所ホームページにも掲載しています。

URL http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=n_year

＜調査結果のポイント＞

子どもの出産に関して意識したこと（P. 2）

- 子どもの出産時に「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識した人は、男性39.5%、女性46.7%

人生設計の実施状況（P. 3）

- 人生設計について「設計済」の人は、男性23.2%、女性17.1%
- 末子が高校生以上の人でも、男性の約半数、女性の4割強が「未設計」

人生設計の効果（P. 4）

- 人生設計の最大の効果は、「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる」（47.6%）
- 健康面でのリスクを意識できている人は、男女とも2割以下

「ライフイベント表」の作成経験（P. 5）

- 「ライフイベント表」を作成した経験がある人は、男性11.6%、女性9.6%
- 「知っているが、作成したことはない」人は、男性28.2%、女性37.0%

「ライフイベント表」の作成機会（P. 6）

- 最も多い機会は、男女とも「個人的に、家庭で」（37.9%）
- 男性では「勤め先のセミナーや福利厚生」（23.2%）、女性では「子どもが生まれたとき」（34.8%）が2位

＜お問い合わせ先＞

（株）第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当（津田・関）
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【URL】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>



《調査の概要》

ライフコースの多様化にともなって、日本では35歳以上で出産する女性が増えています。一般に、経済面での人生設計を考える場合、「子の教育費」「住宅購入費」「老後の生活費」が人生の三大費用とされます。しかし、晩産型のライフコースでは、「子の教育費」に関する支出のピークが後ろずれするために、「老後の生活費」を十分準備できない状況で60代を迎えるケースも少なくないと考えられます。例えば、親が40歳前後のときに子どもをもつライフコースの場合、子どもの独立の時期が60歳前後になるため、50歳代は子どもの教育費や住宅費の負担を抱えながら、同時に老後の生活費を蓄える資金計画が必要になる場合があります。このため晩産型のライフコースでは、経済面での人生設計に関して、将来、末子が成人する時期や子どもが独立する時期を早くから意識して資金計画を行っていく必要があります。

また、40～50歳代にかけての中高年期は、自身や配偶者が健康問題に直面したり、高齢となった親に介護が必要になる人が増える時期です。特に、晩産型のライフコースでは、子育て期間の後ろずれによって、子育てと親の健康・介護問題が重なる可能性が高いと考えられます。

このようななか、晩産型のライフコースを歩む人々のうち、出産時に子どもの独立や成人の時期、あるいは子育ての期間中に家族に介護が必要になる可能性を意識した人は、どの程度の割合を占めるのでしょうか。今回のニュースリリースでは、妻が35歳以上で子どもをもった40～59歳の晩産カップルを対象とするアンケート調査から、人生設計に関する意識について分析しました。

＜調査概要＞

- 調査名 子育てと人生設計に関する調査
- 対象者 妻が35歳以上で出産した40～59歳の男性会社員595名、および夫が会社員で自身が35歳以上で出産した40～59歳の女性492名（計1,087名）
- 調査方法 インターネット調査（株式会社クロス・マーケティングのモニター）
- 調査時期 2016年10月31日～2016年11月4日

＜回答者の主な属性＞（全体、性・就労形態、性・末子の学齢、性・末子出産時の妻の年齢）

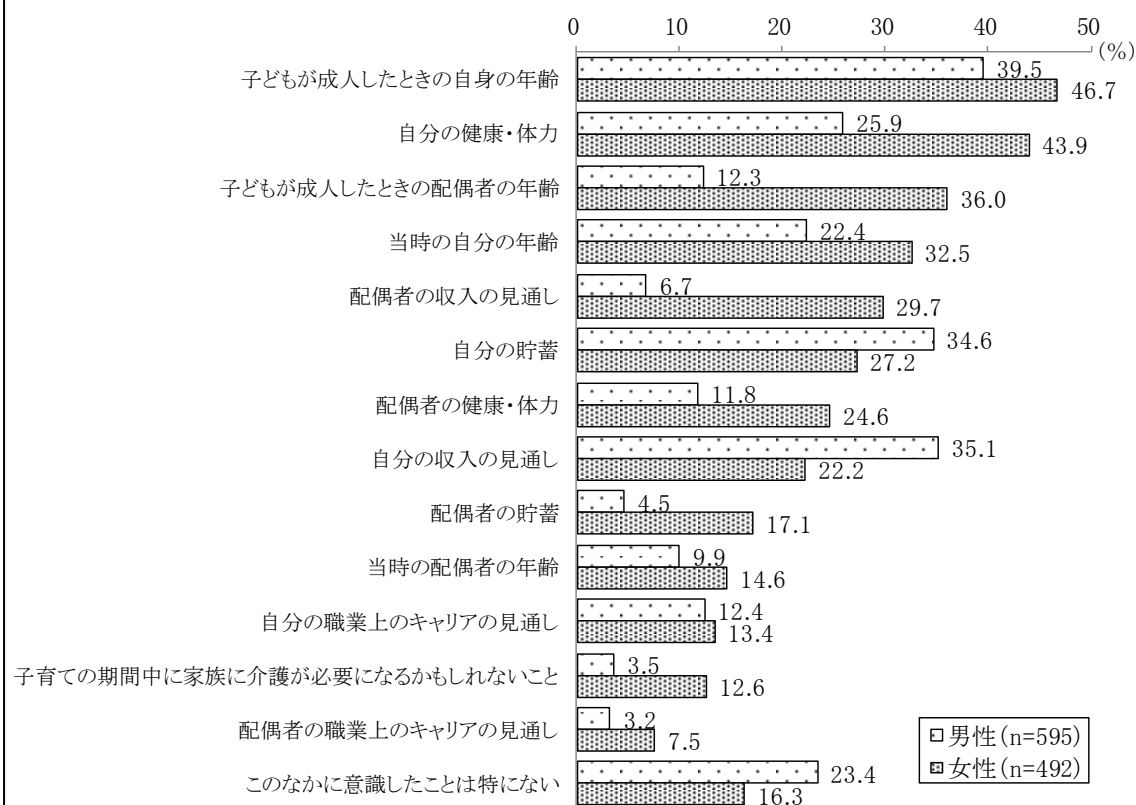
（単位：%）

	就労形態			末子の学齢				末子出産時の妻の年齢	
	正社員	パート等	無職・専業主婦	就園前	小学生	中学生	高校生以上	35～39歳	40歳以上
全体(n=1,087)	70.4	10.9	18.7	32.5	37.3	13.2	17.0	78.7	21.3
男性(n=595)	100.0	-	-	26.4	38.2	13.6	21.8	75.0	25.0
女性(n=492)	34.6	24.2	41.3	39.8	36.2	12.8	11.2	83.1	16.9

子どもの出産に関して意識したこと

子どもの出産時に「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識した人は、
男性 39.5%、女性 46.7%

図表1 子どもの出産に関して意識したこと(性別)＜複数回答＞



図表1は、晩産カップルの男女に、子どもの出産に際して意識したことをたずねた結果です。子どもの出産に関して「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識した人は、女性で46.7%、男性で39.5%となっています。

女性では「自分の健康・体力」(43.9%)が僅差でこれに続き、「子どもが成人したときの配偶者の年齢」(36.0%)、「(出産) 当時の自分の年齢」(32.5%)などが上位を占めます。一方、男性では「自分の収入の見通し」(35.1%)や「自分の貯蓄」(34.6%)が上位を占めます。女性では年齢や自分の健康・体力に関すること、男性では年齢に加えて、収入や貯蓄などの資金計画にかかわることを意識した人が多くなっています。

このようななか、「配偶者の健康・体力」(女性24.6%、男性11.8%)、「子育ての期間中に家族に介護が必要になるかもしれないこと」(女性12.6%、男性3.5%)をあげた人は低い割合にとどまっています。加齢にともなう、将来、配偶者の健康状態が変化したり、家族に介護が必要になる可能性があることを意識した人は、極めて少ないことがわかります。

人生設計の実施状況

人生設計について「設計済」の人は、男性 23.2%、女性 17.1%
末子が高校生以上の人でも、男性の約半数、女性の4割強が「未設計」

図表2 人生設計の実施状況(全体、性別、性・末子学齢別)

(単位:%)

		設計ほとんど できている	ある程度 設計ができて いる	現在考えて いるところ である	気にはして いるが、 あまり考 えてい ない	まったく 考えて いない	設計済	未設計	
全体		2.2	18.2	28.7	38.8	12.1	20.4	50.9	
性別	男性	2.7	20.5	27.1	36.0	13.8	23.2	49.7	
	女性	1.6	15.4	30.7	42.3	10.0	17.1	52.2	
性・末子の学 齢別	男性	就学前	2.5	22.9	26.8	36.3	11.5	25.5	47.8
		小学生	2.6	16.3	32.6	33.5	15.0	18.9	48.5
		中学生	2.5	24.7	14.8	40.7	17.3	27.2	58.0
		高校生以上	3.1	22.3	25.4	36.9	12.3	25.4	49.2
	女性	就学前	2.0	13.3	30.6	43.9	10.2	15.3	54.1
		小学生	1.7	13.5	34.3	36.5	14.0	15.2	50.5
		中学生	0.0	15.9	25.4	55.6	3.2	15.9	58.8
		高校生以上	1.8	29.1	25.5	40.0	3.6	30.9	43.6

注: 「設計済」は「ほとんど設計ができている」と「ある程度設計ができている」の合計割合(以下同じ)。
「未設計」は「気にはしているが、あまり考えていない」「まったく考えていない」の合計割合(以下同じ)。

当研究所が発行する『ライフデザイン白書』では、人生設計について、「経済計画だけでなく、仕事や学業、家庭生活、余暇生活、老後の生活などすべての面を含んだ『自分の生涯総合計画(ライフデザイン)』」と定義しています。今回の調査ではこの定義を示した上で、「あなたご自身は、現在人生設計を立てていると思いますか」という設問文で回答者の人生設計の実施状況についてたずねました。その結果、設計済の人は、男性で 23.2%、女性で 17.1%にとどまりました(図表2)。男女とも最も多くあげられたのは「気にはしているが、あまり考えていない」で、男性で 36.0%、女性では 42.3%を占めています。

性・末子の学齢別に比較した場合、末子が小学生の人では「現在考えているところである」と答えた人が他の学齢の人に比べて多く、男女とも3割を超えます。また、末子の学齢にかかわらず、未設計の人が設計済の人を大きく上回り、末子が高校生以上の人においても、男性の約半数、女性の4割強が未設計の状況にあります。

人生設計の効果

人生設計の最大の効果は、
「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる」(47.6%)
健康面でのリスクを意識できると感じている人は、男女とも2割以下

図表3 人生設計の効果(全体、性別、性・人生設計の実施状況別)＜複数回答＞

(単位: %)

		を人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる	人生に、いつ頃、どんな出来事が起こるのかを考えることができる	自分が働く意識できた場合の経済面で	家族が働く意識できた場合の経済面で	自分の定年を意識できる	病気やケガなど、自分の健康面でのリスクを意識できる	病気やケガなど、家族の健康面でのリスクを意識できる	家族の定年を意識できる	自分の寿命を意識できる	家族の寿命を意識できる	特に効果はない
全体		47.6	35.5	26.4	19.1	19.3	17.7	14.9	13.2	11.4	7.9	24.0
性別	男性	40.7	33.6	30.8	11.3	25.2	16.3	11.4	5.5	11.6	5.9	30.8
	女性	55.9	37.8	21.1	28.7	12.2	19.3	19.1	22.6	11.2	10.4	15.9
実人生設計状況別の	男性	設計済	50.0	47.1	39.9	15.9	31.2	20.3	15.2	10.9	18.8	18.8
		考え中	47.8	46.0	35.4	13.7	30.4	19.3	13.0	5.6	11.8	<u>12.4</u>
		未設計	<u>32.4</u>	<u>20.6</u>	24.0	<u>7.8</u>	19.6	12.8	8.8	<u>3.0</u>	8.1	46.3
	女性	設計済	60.7	38.1	22.6	33.3	10.7	20.2	16.7	28.6	10.7	<u>4.8</u>
		考え中	62.3	45.0	27.2	33.1	17.2	23.8	23.2	26.5	17.2	<u>6.0</u>
		未設計	50.6	33.5	17.1	24.5	9.7	16.3	16.3	19.1	17.8	25.3

注：全体値より10ポイント以上高い場合は太字表記、低い場合には下線表記

人生設計を考えることの効果について最も多くあげられたのは「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる」という点で、男性の40.7%、女性の55.9%を占めました（図表3）。男女いずれでも「人生に、いつ頃、どんな出来事が起こるのかを考えることができる」（男性 33.6%、女性 37.8%）がこれに続いています。晩産カップルの多くが、人生設計を考えることの最大の効果は、人生で必要となる費用や人生にいつどんな出来事が起こるのかについての見通しを立てられることにありと考えていることがわかります。

これに対して、「病気やケガなど、自分（家族）の健康面でのリスクを意識できる」をあげた人は男女とも2割未満でした。人生設計を考えることは、経済面や予測可能なライフイベントの時期に関する見通しを立てられると感じている人が多い一方で、予測することが難しい健康面でのリスクを意識できると感じている人は少なくなっています。

なお、これらの結果を性・人生設計の実施状況別に比較した場合、費用の面に関する効果をあげた人の割合は、人生設計の実施状況が「未設計」の人に比べて、「設計済」の人や「考え中」の人において高い傾向が確認できます。

「ライフイベント表」の作成経験

「ライフイベント表」を作成した経験がある人は、男性 11.6%、女性 9.6%
「知っているが、作成したことはない」人は、男性 28.2%、女性 37.0%

図表4 ライフイベント表の作成経験(全体、性別、性・人生設計の実施状況別)

			(単位: %)		
			あ作知 る成っ ておこ り、が	な作知 い成っ てたい ことが は、	な作知 い成ら ないこ し、も
			知 っ て い る ・ 計	な 作 い 成 ・ 計 た こ と が	
全体			10.7	32.2	57.1
性別	男性		42.9	89.3	
	女性		39.8	88.4	
の性 実・ 施人 状況 設計	男性	設計済	46.6	90.5	
		考え中	64.5	73.9	
		未設計	53.4	87.0	
	女性	設計済	21.0	96.0	
		考え中	67.6	74.3	
		未設計	50.6	88.8	

続いて、人生設計をより具体的に考えるための方法・ツールとして、特に、人生に起こるさまざまなライフイベントに必要な費用を考える際に用いられることの多い「ライフイベント表」の作成経験をたずねました。

その結果、「知っており、作成したことがある」と答えた人は 10.7%にとどまり、「知っているが、作成したことはない」「知らないし、作成したこともない」と答えた人がそれぞれ 32.2%、57.1%を占めました(図表4)。晩産カップルのうち、「ライフイベント表」を知っている人は4割を超えますが、実際に作成した経験がある人はそのなかの一部に限られていることがわかります。

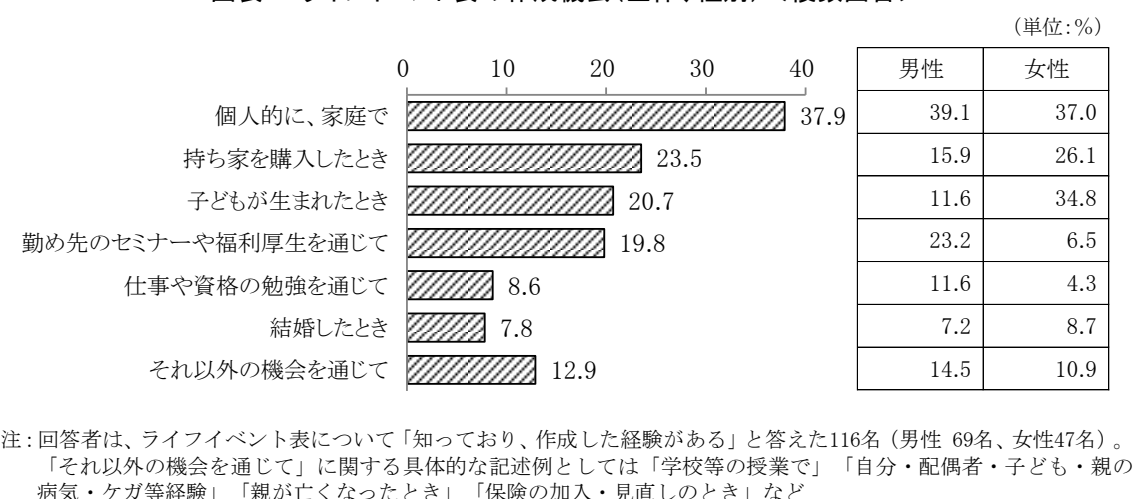
性・人生設計の実施状況別に比較してみると、人生設計について「設計済」と答えた人では作成経験者が男女とも 25%を超え、「知っているが、作成したことはない」と答えた人を含めれば「ライフイベント表」について知っている人が6～7割を占めます。「考え中」や「未設計」の人に比べて「設計済」の人では、作成経験者の割合も、知っている人の割合も大幅に高いことがわかります。

ただし、人生設計について「設計済」と答えた人であっても、実際に作成した経験がある人は4人に1人程度の水準にとどまっていました。このことから、人生設計を立てている人であっても、ライフイベント表の作成経験をもつ人は少数派だと考えられます。

「ライフイベント表」の作成機会

最も多い機会は、男女とも「個人的に、家庭で」(37.9%)
男性では「勤め先のセミナーや福利厚生」(23.2%)、女性では「子どもが生まれたとき」(34.8%)が2位

図表5 ライフイベント表の作成機会(全体、性別)＜複数回答＞



「ライフイベント表」を作成した経験があると答えた人に、どのような機会に作成したのかを複数回答でたずねました。その結果、最も多くあげられたのは「個人的に、家庭で」(37.9%)であり、「持ち家を購入したとき」(23.5%)、「子どもが生まれたとき」(20.7%)がこれに続きました(図表5)。つまり、ライフイベント表を作成した経験をもつ晩産カップルの男女では、ライフイベント表を、結婚・出産といったライフイベントや勤め先のセミナーなどの具体的なきっかけによらず作成した人が最も多いということになります。

サンプル数は限られるものの、性別に比較した場合、男女とも「個人的に、家庭で」(男性 39.1%、女性 37.0%)をあげた人が最も多い傾向は共通していたが、男性では「勤め先のセミナーや福利厚生を通じて」(23.2%)がこれに続くのに対し、女性では「子どもが生まれたとき」(34.8%)や「持ち家を購入したとき」(26.1%)などのライフイベントがこれに続いています。男性では「勤め先のセミナーや福利厚生」がライフイベント表を作成するきっかけの1つになっていますが、女性の場合、働いていた、働いていた経験があっても、人生設計について考えるようなセミナー等を受講する機会が少なかったのかもしれない。一方、女性では子どもを生む際に、就労を継続できない(しない)可能性について考える人が男性に比べて多いと考えられることから、男性に比べて子どもの誕生がライフイベント表の作成につながっているのではないのでしょうか。

《研究員のコメント》

(1) 晩産カップルの人生設計の実態

今回の調査では、近年増加する 35 歳以上の女性による出産に注目し、妻が 35 歳以上で子どもをもった 40～50 歳代の晩産カップルの人生設計への意識を分析しました。一般的に、経済面での人生設計では、末子の成人や独立の時期を十分意識した資金計画を行う必要があるといわれます。子どもが成人や独立の時期が後ろずれする晩産型のカップルでは、そうした視点がより重要になると考えられます。しかし、今回の調査で、晩産カップルのうち、子どもの出産に際して「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識していた人は、男性で 4 割弱、女性で 5 割弱にとどまりました。また、人生設計の実施状況をみると、男女とも「未設計」の人が半数前後を占めています。末子が高校生以上の時期を迎えた人においても、男性の約半数、女性の 4 割強は未設計の状況にあるのです。

こうしたなか、晩産カップルのうち、人生設計について「設計済」と答えた人では、「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認することができる」という点を効果としてあげた人が男性で 5 割、女性で 6 割を超えました。また、「人生に、いつ頃、どんな出来事が起こるのかを考えることができる」という点をあげた人も、男性で 5 割弱、女性で 4 割弱を占めました。人生設計を立てている晩産カップルの男女では、人生の費用面での見通しをたてることや、自身の人生設計に関する時間軸を意識できることへの効果を実感している人が多くなっています。こうした視点を早くから意識することは、晩産カップルに限らず、多くの人にとって有益だといえるでしょう。

(2) 人生設計の効果—意識しにくい、自分・家族の将来の「健康リスク」

調査の結果、人生設計の効果として、費用面の見通しがたてられることが高く評価された一方で、「病気やケガなど、自分や家族の健康面でのリスクを意識することができる」という点への評価は、人生設計について「設計済」の男女においても 1～2 割前後にとどまりました。中高年期以降は、自身や配偶者に健康面での問題が生じたり、親に介護が必要な状況となる人が少なくないのですが、今回の調査結果では、晩産カップルの男女のうちこれらの点についてまで考えが及んでいる人はかなり少ないという事実も浮かび上がりました。

具体的にみると、子どもの出産に際して、「自分の健康・体力」を意識した人は女性の 43.9% に対し、男性では 25.9%、「配偶者の健康・体力」ではそれぞれ 24.6%、11.8% に過ぎません。また、「子育ての期間中に家族に介護が必要になるかもしれないこと」を意識していた人にいたっては、女性の 12.6%、男性の 3.5% にとどまっています。以上の結果から、晩産カップルの人生設計では、子どもの独立や成人の時期を意識して資金計画を行うとともに、ライフイベントとして意識したり、事前に予測することが難しい自分や家族の将来の健康リスクについても早い段階から意識して、備えを考えていくことが重要になるといえます。

(研究開発室 上席主任研究員 北村安樹子)